

# 北部九州における宗教民俗の歴史的動態

## — 二丈町淀川「大飯食らい」を中心に —

白 川 琢 磨

### 1. 対 象

福岡県糸島郡二丈町の淀川天神社（天満宮）では、毎年1月の第4日曜日（かつては25日）に百手祭が行われる。同社は、南方に聳える二丈岳（標高711m）に源を発する淀川の流に沿った淀川集落に位置する小社であり、祭神は二丈岳山上の菊理姫神とされている<sup>1</sup>。行事の経緯について述べると、当日午前10時頃から、集落（約20戸）の各戸代表たる男性が、「イソズキ」という生木で拵えた弓と篠竹の矢数本を手に天神社に参集してくる。11時から、この神社を統括する深江神社宮司の下で祭式が行われる。その後、神社の前の道路上から、対面する公民館の横に設けられた的に向かってまず宮司が3回ずつ3度の弓射を行い、続いて約20名の各戸代表<sup>2</sup>が、順次同じく3回ずつ3度の弓射を行う。その後の的を取り外し、最後に、全員で公民館横に並んで今度は淀川の向こう側の二丈岳に向かって一斉に弓射を行う。この最後の弓射を「山打ち」と称する。ここまでは所謂「百手祭」といわれる通常の行事と大差はないが、この後、場を公民館に移して行われる直会が「大飯食らい」と呼ぶ独特の形式を有している。

公民館は十畳程の座敷（広間）と台所を擁した簡素な造りである。座敷には、口の字方に人数分の膳が並べられる。台所では女性たちが忙しく立ち働いているが、座敷に足を踏み入れることはない。座敷は女人禁制とされており、台所との仲介は給仕方が行う。給仕方は「座方<sup>ざかた</sup>」と呼ばれ、「御座<sup>おんざ</sup>」1名、「寄り子」4名の計5名から成る<sup>3</sup>。膳は、「本膳五菜の膳」[写真1]といわれ、向かって左上がせり、右上がなます、中央に大豆及び大根の煮物、左下に御飯、右下に磯菜汁と定められている<sup>4</sup>。酒杯は、当初は普通に盛られた御飯の上に伏せて置かれる。着座は、床の間を背

<sup>1</sup> 『二丈町誌』1967、p.480。菊理姫という祭神から白山宮が連想されるが、それは伝承であり、現在の祭神は天満大神（菅原道真）である。伝承によれば、この天満大神は元来、この地の豪族であった和田新右衛門の宅地に祀っていたものを川上宮の跡地に移したとされている。だとすれば、本来この社は川上宮であり、その祭神が菊理姫ということとなるが、詳細は不明である。また一説には祭神は与登比売（ヨドヒメ）とも云われる（『二丈町誌（平成版）』2005、p.731参照）。

<sup>2</sup> この20名という数字は本来の集落戸数である。現在では、高齢化・少子化によって次第に代表を出せなくなっている。因みに平成18年1月22日の場合は、16名であった。

<sup>3</sup> これも本来の数である。平成18年の場合、寄り子が1名減少していた。

<sup>4</sup> 現在では、せりと磯菜汁に鯨が、なますには鰯の焼き物が添えられている。しかし、品目そのものは変更されておらず、座方から真冬にせりを採る厳しさが語られる。



写真 1 : 二杯目以降の膳



写真 2 : 飯を盛る座方

にした上座に宮司を中央に長老が並び、右座、左座ともほぼ年齢順に着座し、上座に対面する下座には初参加者が座る。座敷中央に飯櫃が二つ置かれ、それらを取り囲むように座方が着し、直会が始まる。まず、座方が上座から順に酌をして廻り、酒杯を傾けてから、最初に普通に盛られた飯を食べ始める。一杯目が終わろうとする頃、座方は飯椀を中央に運び、二杯目はかなり山盛りに盛った御飯を運んでくる。この頃から座は賑やかになる。悲鳴を上げる新客と食べるとけしかける座方のやり取りが各所で起こる。二杯目は椀の上の部分を食べ終えた段階で運ばれ、なお高盛にした飯が置かれる。杓子を椀の三方に差し入れて寄り子三人がかりで固めて高盛にする場合もあるという [写真 2]。座の全体を見渡すと主に攻められるのは初参加者（新客）である。ため息をつきながら箸を運んでいると突然、頭に徳利に入れた水をかけられることもある。このようなやり取りが暫く続き、最後は座方に降参して、残った御飯にお湯を足してもらって湯漬けにして食べ終え、膳を下げてもらうのである。

こうして全ての膳が下げられた後、再度全員が着座して、新たな座方を選出する儀式を行う。三方に入れられた籤を順番に引き、新しい御座 1 名と寄り子 4 名を選出する。現在は略されているが、かつては選定された新座方が給仕役となって、旧座方をねぎらったそうである。

これが現在「大飯食らい」と呼ばれている行事の概略である。新聞やテレビなど地元のニュースにはとり上げられ、「笑いの絶えない（ユーモア溢れる）行事」などと紹介されているが、かつては袴着用の上で出席したといわれること、また座敷の女人禁制という制約を考えると、ユーモア感覚から作り出されたイベントであるとは云えない。起源を示す文書などがあればいいのだが、明治末期以降の座方の記録はあるものの起源を示す記録はない。公民館に収納されている膳部を納める櫃に「文久四年甲子正月吉日」という墨書が唯一の歴史の手がかりである。文久 4 年（1864）は甲子であり、櫃の古さから言っても江戸時代末期には遡りうるが、それ以上は不明である。

まず、考えてみたいのはこの行事が淀川集落のみに関わる行事である点である。それは行事に使用する米の徴収方法に示されている。行事に先立って、座方が米を徴収するのだが、その分量は一軒一升ずつであり、座方は右ないの藁縄に結び目一つずつ拵えていき、二十軒を数えるというや

り方が現在でも続いている<sup>5</sup>。これは氏名を記録する必要のない対面的共同体特有の方法であり、参加者も各戸代表であるから、この行事は完全に集落「内部」の行事であり、外部に向かって開かれてはいない。

さらに、この行事で交代する座方であるが、淀川集落の年中行事として、これ以降、6月の天神社境内にある祇園社の祭、8月に集落内にある観音堂の祭、9月には二丈岳の菊理姫神を対象にした風止め祭、10月の天神社の「おくんち」、11月最終土曜の御日待（注連縄作り）、最後に1月の百手祭と年6度の祭を担当する頭屋（当屋）の役割を担っている。しかしながらこの時を除いて、こうした特殊な直会が伴う祭はない。しかも他地域と違って頭屋とは云わず、御座・寄り子から成る座方という特殊な名称が用いられるのである。

また、淀川集落の社会的側面では、20戸の内、中園姓7戸、重姓6戸、古家姓が3戸認められ、その内4例の同族（本分家）関係が認められた。しかし、系譜やそれをめぐる伝承にも行事に関する手がかりはみられなかった。

さて、近隣にもこの「大飯食らい」に類する行事がない以上、その儀式性、形式性、そして行為実践に伴う僅かな強制感や威圧感をもとに、まず、栃木県日光の強飯式を比較の対象としてとり上げてみたい。

## 2. 比較

大飯あるいは多食の強制として第一に連想される事例は、栃木県日光輪王寺の強飯式であろう。毎年4月2日、山伏たちが大椀に盛った三升の飯を声高に強いる儀式で日光責めとも称されてきた。筆者が調査したのは20年以上も前の事になるが、実際にこの行事に携わっている輪王寺光樹院の柴田立史に従って大まかに行事の経緯を振り返ってみたい<sup>6</sup>。午前11時、袈裟姿の衆僧、導師、修験先達と強飯僧（山伏）、そして強飯を頂戴する袴姿の受者らが入堂する。堂内の扉が全て閉ざされた後、顕密護摩供の修法が行われる。この三天合行供という日光三山の仏神に対する独自の密教修法を終えた後、受者は内陣に着座させられ、強飯が始まる。まず、数名の強飯僧が三方に朱塗りの大杯を載せて現れ、「手を出そう」と怒鳴り、受者に杯を持たせて酒を注ぎ飲ませる。そして一旦退いた後、三升の飯を盛った大椀を持って現れ、受者の前に置く。大先達による祈願文読誦の後、うでごろ肘比という丸太を両脇に挟んだ強飯僧らが受者の前でそれを打ち合わせ、「御供を頂上に捧げて頭こうべを下げよ。忝くも三社権現より賜る所の御供じゃ、謹んで頂戴あろう。もそっと下げよ、頭ずが高い」と叫び、受者は頭を畳につけその上に大椀を捧げる。そして大先達の口上、「こりゃ、当山古実万代不易の強飯、一杯二杯に非ず七十五杯、づかづか取上げてのめそう。そもそも此の強飯と謂っぱ、…（中略）…有難う七十五杯、一粒も残さずづかづか取上げてのめそう。容易に心得て頂戴はなる

<sup>5</sup> 興味深い事であるが、この藁縄は、一方が頭で他方が尾を示す竜（蛇）型のものであり、淀川天神社だけでなく北部九州各地の神社の鳥居に付けられているものと極めて類似している。

<sup>6</sup> 柴田立史「日光の延年舞と強飯式」宮家準編『山の祭りと芸能』上巻、平河出版社、1984、pp.218-222

まい。しかと持とう。」を聞く。大先達退出後、頭を上げた途端に今度は菜皿を持った強飯僧が登場し、受者に菜皿を持たせて、菜についての口上を述べ立てる。さらに退出後今度は金甲きんこうという鉢巻状の荒縄を持って現れ、「毘沙門天の金甲を授く。七難即滅、七福即生、四魔退散、諸願成就」と言って受者の頭にこれをねじ入れる。その後、銅鑼、法螺貝、太鼓が一斉に打ち鳴らされる中、大煙管や捻り棒などの責め道具を持った強飯僧たちが「こおりゃ」と大声を上げながら走り出て、受者の前で「目出度う七十五杯」と叫んでそれらを放り出して、引き下がり、強飯式を終了する。

全体に強制・威圧という側面が目立ち、日光責めと呼ばれるに相応しい文字通りの強飯である。しかし、儀式としての形式性が顕著で、受者は実際に飯を口にするわけではない。酒－大飯－菜という要素は共通するものの、直接の影響や関係を指摘できる状況にはない。この日光の強飯式については、明確な起源があるわけではないが、日光修験の入峰修行に際して峰中に供えられた御供を持ち帰り、人々に与えたのが始まりとされている<sup>7</sup>。また、この強飯式の直接の影響の下に成立した行事として、栃木県下に幾つかの強飯行事が見られる。例えば、栗野町発光路の行事は、1月3日に土地の氏神である妙見神社で、1年の祭り当番の受け渡し式に続いて、地元の青年が扮する山伏と強力が新旧当番と氏子に高盛の赤飯を強いるというもので、頭屋交代とも重なって民俗化しているが、これなども地理的に見ても日光の強飯式が伝播したものであることは明らかである。

ここで考察の対象としている「大飯食らい」を仮に「大飯」と称して置くとして、問題は「大飯」と「強飯」との関係である。強飯は、栃木県下を中心に関東に僅かに分布するに過ぎないが、その研究や解説は比較的多い<sup>8</sup>。一方、大飯は直接にそれを扱った研究はほとんどなく、云わば強飯との関係において言及されるに過ぎない。例えば、『日本民俗大辞典』の「強飯式」の項目では「…この行事は、民間の大飯食らいの神事などの行事が日光修験に取り入れられ、日光山の権威を象徴的に示す行事として伝えられてきたもの」<sup>9</sup>（傍点筆者）とされ、この大飯食らいの神事は「各地で行われて」<sup>10</sup>いるとして、群馬県利根村の庚申待と奈良県田原本町の観音講の二例が挙げられる。さらに大飯食らいの神事では「五合とか一升など高盛りにした飯を無理に食べさせることが強調されているが（現在では儀礼化していることも少なくない）、基本的には祭を構成する要素の一つ供物、あるいは神人の共食という要素が強調された習俗にほかならない。椀に山盛りにすること自体、葬送習俗・産育習俗の枕飯や産飯にみるように、神に供える方式の一つであった。」<sup>11</sup>とされている。

この例に限られるわけではないが、強飯に関する先行研究には、民俗学的解釈の枠組が一般に認められる。それによると、まず民間に大飯を強制したり競争したりする行事が広く行われているこ

<sup>7</sup> 「強飯」、『修験道辞典』（宮家準編）東京堂出版、1986、p.121参照。

<sup>8</sup> 福原敏男『神仏の表象と儀礼—オハケと強飯式』歴博ブックレット23号、(財)歴史民俗博物館振興会、2003、pp.49-94に、強飯に関する先行研究がまとめられている。福原自身は強飯式を「近世の権力構造のなかで、幕府・藩・天皇権力への饗応儀礼として成立したもの」(p.54)という解釈を呈示している。だが、本稿の対象は大飯にあるので論評は控える。

<sup>9</sup> 『日本民俗大辞典』上巻、吉川弘文館、1999、p.602。因みに同辞典の「大飯食らい」の項目には、昔話や説話のみが扱われて、現行の儀礼についての記述はない。

<sup>10</sup> 同上

<sup>11</sup> 同上

と、そして強飯式はそれが特殊化した事例であるという見方である。では、そうした大飯行事の本質は何であるかという、それは本来、接客、歓待の作法であり、それが民間で若者組への加入の際の修練の儀礼となったり、あるいは神事や仏事に際しては、神や仏への供物を、神と人々が共に食べる大飯儀礼となったという見方である。そして、何故、その対象が米飯なのかという点に関しては、米や飯に靈力や呪力を認める信仰の存在が指摘されるのである<sup>12</sup>。

しかしながら、こうした見方あるいは枠組そのものには果して問題はないのであろうか。確かに、高盛飯という供物の形式は、枕飯や産飯の例を挙げるまでもなく、全国各地に見られるものであろう。その基底に米飯のもつ靈力や呪力に対する信仰があるということも解釈としては認められる。しかし、高盛飯という供物の形式と、それを儀礼的に食するという実践形式の間には断絶がある<sup>13</sup>。そうでないと、「民間」で「自然発生した」大飯行事が「全国各地に」に見られるということになるのだが、事実はそうではない。後述するが、現在、全国的に数例があるだけである。廃絶したものがあつたとしても、「各地に」あつたとは云えないのである。むしろ、大飯行事が各地にある（あつた）という言説は、その一部が強飯という形式に繋がったという「結果」を説明する際の「前提」とされてきたに過ぎないのではないか。そして、その強飯も最終的には「神人共食」で説明される。確かに全国各地で実際に行われている「直会」を「神人共食」で説明する事は「可能」である。しかし、大飯の場合は不可能である。そうした実践形式を伝達・教唆した主体は誰かということを考えねばならない<sup>14</sup>。強飯の場合は、「民間から取り入れた」かどうかは別として、日光修験、即ち輪王寺の行人方が主体である。では大飯の場合はどうか。事例を検討してみたい。

まず、大飯という名称は使われないが、能登の「もっそう飯」がある。石川県輪島市久手川町の当番の家で、2月16日の早朝、「もっそう」と呼ばれる木枠で筒型に盛った大飯が用意され、集まった人々が食べる行事である。椀に3～5合程を盛るのであるから大飯食らいに類似する。この行事には、伝承があり、加賀藩の時代に圧制に苦しんだ農民が隠し田を作って、年に一度心ゆくまで白米を食べたというものである。淀川の大飯にもこの種の伝承があり、当事者は問われると、昔は貧乏で腹一杯飯を食うということがなかったので、年に一度はこのような機会を持ったのだというものである。しかしながら、これらは起源を説明するものとは言えず、むしろ連綿と繰り返されてきた儀礼行為に対して当事者が施した再解釈とも言えるものである。能登の場合に用いられる「もっそう」は、浄土真宗の大谷派や佛光寺派で仏飯を筒型に盛るために用いられる「盛槽」のことだと思われる。この地域が浄土真宗地帯であることと関係はあるが、しかし他の真宗地域にこうした行事があるわけではない。むしろ、真宗布教以前の段階にあつた行事が、真宗の影響を受けて改変しつつ存続としたとも思えるが詳細は不明である。

<sup>12</sup> 柳田國男「食物と心臓」『定本柳田國男集』第14巻、筑摩書房、1969、pp.223-375

<sup>13</sup> 宗教儀礼が行為の実践形式を踏襲するものであるという点については、タラル・アサド／中村圭志訳『宗教の系譜』岩波書店、2004参照。

<sup>14</sup> この点については『「大飯食らい」か、『強飯』か？—ある民俗行事の解釈をめぐる—』と題して日本民俗学会第55回年会（山口大学、2003）で発表した。

室町時代から五百年以上にわたって続くとされているのが、鳥根県鹿足郡柿木村の「萬歳楽」である。12月の上旬に二日にわたって行われるが、初日は「よどの日」と呼ばれる「餅食い」の日で、二日目「ひのはれの日」で「大飯食い」の日である。収穫感謝と豊年祈願の行事と言われている。下須地区で五組が輪番で当屋を務めており、20人程の組代表が集まって、高盛にされた約2合の飯を食べ、お代わりを勧める接待役の女性らと攻防を繰り広げる。起源は不明である。やはりここでも、昔は米は作っていても食べるのは特別な日だけであり、年に一度たらふく食べて交流を深める機会として始まったのではないかという再解釈がみられる。

より神事的色彩が強いのが岡山市杉谷の岩山神社の「大飯おおめしぐい」である。やはり、当屋制行事である。2月の第2日曜日の朝、人々が当屋に集まって神事を行った後、神主・当屋主・次年度の当家主が正座する前に膳に載せられた高盛の一升飯が運ばれ、これを食べるのである。かつては二日間行われたといわれる。これが終ると、全員で幟旗を立てて岩山神社に参拝し、本殿で祭式が行われる。なお、地名に大飯を残すのが、広島県比婆郡東城町（現・庄原市）の「多飯が辻山」（1040m）である。多飯は「おおい」と読むが、山麓の塩原で現在も4年毎に行われている「大山供養田植」の際に豊作に感謝して大飯を食べたことに由来するという。現在でも田植行事が終った後、多飯が辻山に登り、供養札を納める。山頂近くに大仙神社があるが、大山遥拝所であり、中世期は神仏混淆の修験道場であったと伝えられる。

東日本では、茨城県西茨城郡岩瀬町（現・桜川市）の本郷及び下泉地区に「大飯おおめし祭り」がある。下泉にある鹿島神社の祭礼（12月15日）の直前に行われる行事で、かつては旧暦11月13-15日であったが、現在は15日より前の日曜日に両地区の当屋で行われている。この後、神社で「当屋わたし」があるので、やはり当屋制と深い関係が見られる。かつては一升祭りと称されたが、現在では両地区とも6-8合の飯が供され、大漁の焼サンマと共に食される。給仕役は「お鹿島様」と呼ばれ、男根を象徴する「サイマラ棒」を下げている。また漁師姿で、大草履で大煙管を携えた「イマハマ」が登場し、滑稽な問答が行われる。また行事の最後に、当屋主人に対して若者が「大ハンギリ被せ」を行う。飯は高盛で限りなく山型に盛られる。神社の神主の参加は勿論であるが、鹿島信仰や生殖信仰との関係が特徴である。

最後に、比較的に古式を保持していると思われる静岡県磐田市豊田町の「大飯おおめし祭り」をやや詳しく見ておきたい<sup>15</sup>。行事が伝えられているのは、天竜川河口から約12km遡った旧勾さぎさかにし坂西村の下島集落（下組）、戸数38戸である。祭りは昔から独立して行われているので、隣接する上組や中組から参加する人は居ないそうである。大飯祭りが行われるのは毎年1月11日で、場所は元は東光寺であったが、昭和27年に東光寺が本寺の増ぞうさん参寺に合併し、廃寺となったので、その跡地に昔から信仰が寄せられてきた境内の「薬師堂」が再建され、そこで増参寺住職を招いて行われている。なお、この薬師堂は勾坂西下公会堂を兼ねている。

<sup>15</sup> 「勾坂西下組のオオメシ祭り」『静岡県の祭り・行事』（静岡県教育委員会編）2000、pp.55-59。以降、祭りの経緯についてはこの資料に基いて述べてゆく。

村（下島）の氏神は「諏訪社」である。この諏訪社の春祭り（祈年祭）が、現在同じ11日であることから、午前中に諏訪社に神官を招いて祈年祭を行い、午後から薬師堂で増参寺住職を招いて大飯祭りの祈禱会を行うといった二元的構成になっているが、後述するように祈禱会に勧請するのが般若十六善神と諏訪大明神であり、祈禱会の直会（即ち、大飯祭り）に祀官様（即ち、神官）も出席することを考えると、本来は神仏混淆の寺社行事であったとみて間違いはない<sup>16</sup>。

運営組織についてであるが、ここでは当屋（頭屋）という言葉は用いられていない。責任者は3名の氏子総代であるが、その内の長老が代表総代となる。その総代の下で、1年間の祭りの世話役を担当するのが「禰宜番」で、かつては2名、現在は3名となっている<sup>17</sup>。選出は1年交代の輪番である。この禰宜番の交代が行われるのが、大飯祭りの直後、同じ場所においてである。まず、「仲人」と呼ばれる代表総代が中央の上座に着座し、その下座の東側に退任する禰宜番3名（下番と称す）、西側に新任の禰宜番3名（上番と称す）が向かい合って着座する。中央に置かれた三枚の皿には、大根の短冊が十字形に重ねて盛られる。仲人の左手、下番側に置かれた諏訪社の鍵もこの時引き継がれる。村人が見守る中で、仲人は、下番から一人ずつ盃を交わし、その都度大根の短冊を箸でつまんで差し出す。これらが終ると、仲人は上番に対して心得を述べ、下番に対してはねぎらいの言葉を述べるのである。この儀式は極めて厳粛で「むかしは羽織袴で威儀を正し、その雰囲気には近寄りたいたいものがあり、女衆はそばに寄れなかった」<sup>18</sup>と語る老人もいるそうである。

さて、時間が前後するが、祭りの前夜、村の若者が薬師堂に集まり、氏子総代と禰宜番の立会いの下で持参した大根や人参で男女のシンボルに当たる陰陽物をできるだけ写實的に作り上げる。この陰陽物が祭りの不可欠の伝統的な奉納物とされる。また、大飯と共に供される膳部は、配置は淀川と類似しており、向かって左上に「オヒラ」（大根・人参・里芋・飛竜頭から成るケンチン）、右上に「オスワイ」（大根と人参の酢和え）、中央に「オツボ」（タタキ牛蒡）、左下に「御飯」、右下に「汁」である。なお、この祭りは村人全員が大飯を食べ合う祭りであるが、特に新嫁の加入儀礼ともなっており、新嫁の分だけは、オヒラのケンチンの部分を陰陽物に調整し、上に飛竜頭を載せるそうである。

大飯祭りの祈禱会は、薬師堂内に臨時の祭壇を設け、正面に伝来の十六善神の掛軸を掛け、上段の左右に御神酒と大飯を供えて行われる。この大飯は、三脚付きの曲げ物に三合の御飯を高盛にして箸を立てたものである。そして下段の両脇には前日に準備された陰陽物が並べられる。祈禱会は、僧侶による十六善神と諏訪大明神の唱名と般若心経や法華経寿量品偈の読経を中心に進められ、村人は順次線香を供えて礼拝する。この儀礼が終了すると、その場で直会が始まる。まず、僧侶と祀官様（神官）、そして氏子総代が上座に着く。かつては村人全員、現在では各戸1名の着座が終る

<sup>16</sup> ここで云う「寺社」とは近世期の祈禱系寺社を念頭に置いている。その淵源は、中世の寺社勢力にあり、顕密の僧侶が顕教・密教の修法を司り、さらに神分、即ち密教的な神祇祭祀を、神人を統括しつつ行ったことに基く。しかし、近世期には勢力と呼べる程の規模を失い、単立の拠点のみとなったが、修法そのものは連続していると考えられる。『黒田俊雄著作集』第3巻（顕密仏教と寺社勢力）、法蔵館、1995参照。

<sup>17</sup> この下に年番の「屋敷」という単位があるが、この祭りには直接関係しないので触れない。注15の資料を参照。

<sup>18</sup> 同上、p.57

と、祭壇に供えられた大飯と御神酒が禰宜番の手によって全員に分け与えられる。それを「御供様<sup>おんくさま</sup>」と称する。それから大飯食いが始まる。かつては、「テツパチ」（山盛）の大飯を三回お替りするという伝統があったそうである。現在では、各自に配膳された脚付の高膳からテーブルに代わり、また仕出し料理に変わるなど大きく変化しているが、招待される新嫁の分については高膳で膳部の配置も前述した様式が守られている。新嫁は少なくとも一回はお替りをするものとされ、また、陰陽物の作り物を食べさそうとする若者連とのやり取りがあるとされる。

この祭りの起源に関しては、村では「一時、オオメシ祭りをやめたらムラに悪い病が流行した」とか、「オオメシ祭りをやっているの、むかしからムラに若後家がない」との伝承がみられる<sup>19</sup>だけで、不明である。これらの伝承も儀礼執行の、そして中止の効果（結果）について述べているだけで起源を語るものではない。しかも、他地域の諸種の祭りに関してもよく見られるタイプの伝承である。

だが、この下島の「大飯祭り」は、これまで見てきた他の大飯行事との、そして何よりも淀川の「大飯食らい」との比較において、幾つかの重要な示唆を与える事例である。まず第一に、祈祷会に付随する直会における行事である点である。その祈祷会の内容は、法華経と、十六善神や諏訪明神といった仏神を対象にした神分作法とがセットになった顕密修法である。神仏混淆の祈祷系寺社が、この特殊な大飯行事を担った主体ではなかったかということを示唆する。鹿島神社もかつては寺社であったし、多飯が辻山の由来にもそうした関連が認められる。「もっそう飯」は真宗的改変を経てると推測はされるが、少なくとも仏教の影響は認められる。何よりも、はるかに大きな規模で顕密修法が貫徹された上で行われる輪王寺の強飯式は、近世期の祈祷系寺社の淵源に該当する「寺社勢力」の行事であり、学侶方と行人方のうち、行人方の儀礼形式が特化されて成立したとも考えられるのである<sup>20</sup>。第二に村の儀礼として見た場合、参加する集落の限定性が顕著である点である。他の事例にも認められるかもしれないが、特に下島と淀川に顕著であり、両者の類似性も認められる。役職に関しても、淀川の御座と寄り子から成る座方に対して、下島では氏子総代と禰宜番の役割が対応していて共に当屋（頭屋）という名称は用いられていない。とにかくそうした役職が僧侶や神官と共に行事を統括しているのである。そして「当（頭）わたし」に似た交代儀礼が大飯行事の直後に行われている。参加するのが各戸代表という点も共通しているが、本来は下島の例にあるように集落（狭義のムラ）全員の参加という形態であったかもしれない。第三に、膳部に関してである。淀川、下島については、菜の種類に違いがあるものの、飯・汁の二椀、菜三皿の配置は共通している。膳椀とも黒の漆塗りで、脚付の高膳というのは、淀川では今日でも守られている。違うのは、「御供様」の呼称からも分かるように、下島では祈祷会の供物である酒と飯を分かつことが大飯食らいの前提となっているのに淀川ではその部分が欠如し、御供の飯と大飯が分離してい

<sup>19</sup> 同上、p. 56

<sup>20</sup> 黒田俊雄『寺社勢力—もう一つの中世社会』岩波新書、1980。同「白山信仰の構造：中世加賀馬場について」『黒田俊雄著作集』第3巻、1995、pp. 242-310では、寺社勢力の地域的展開の中で組織内部の独自の権力的配置が生じてくることが論証されている。それが地域独自の儀礼形式を生じさせる原因とも考えられる。



ることである。この点はやはり、下鳥型を本来の形式と捉えるべきかもしれない。最後に、下鳥では大根や人参を細工した陰陽物の要素が儀礼の重要な部分を構成していることである。この点は、鹿島神社の「サイマラ棒」にも認められるが、淀川など他の事例には見られない。東日本と西日本の違いによるものか、事例が少ないので明らかではない。新嫁に対する特別な饗応に見られる加入<sup>イニシエ</sup>儀礼<sup>ニシエ</sup>の要素は、淀川では新客（初参加者）に対して水掛けや特段にお替りを催促するなどの行為にも認められる。強飯式などはこの要素が特殊化した形式と見なすこともできよう。

### 3. 類 例

さてここで一旦視線を福岡県に戻すことにする。ここまでは専ら大飯行事の部分に注目してきたが、大飯食らいは「百手祭」の直会の形式であることは明らかである。百手祭は正月から春に行われる、的に向かって矢を射て、その矢の当たり方で吉凶を占ったり、悪霊退散を念じたりする全国的に広く分布する儀礼であるが、相互の影響を考察できる範囲内、福岡県下に限定してその事例を検討してみたい。なお、弓射という内容の類似性に注目するなら県下に広く分布する「歩射」等の名称をもつ行事も含まねばならないが、そうすると対象事例数が多くなりすぎるので、「百手祭」という名称をもつものだけに限定して二例を選び、その要点を見て置きたい。



写真3：股手の藪

福岡県豊前市八屋の、燧灘に面した明神ヶ浜にある巖島神社では、毎年3月5日に百手祭が行われている<sup>21</sup>。神社の参道に入っすぐの所に鬱蒼とした小さな藪があるが、「股手の藪」[写真3]と呼ばれている。この藪は、昔、悪事を働いて人々を困らせた鬼の股と手が埋められた所であるとの言い伝えがある<sup>22</sup>。注連縄の張られた藪の中程に「鬼」と墨書した的を掛け、三回の弓射を行う。弓射のやり方は「墓目<sup>ひきめ</sup>の法」と言われ、第一矢は的の上一尺を狙い、第二矢は下一尺、そして第三矢は二枚重ねた的を射抜くというものである。これが悪魔を追い払うやり方とされているが、墓目という名称自体が、弓矢で憑物を威嚇して退散させる修験の修法との関連を暗示させる<sup>23</sup>。弓射を行い、その他この祭りを統括する神官は、代々、やや離れた山麓地帯に位置する大富神社の宮司が務めている。大富神社は明治以前は「宗像八幡宮」と称しており、古い縁起と格式を有する古社で、

<sup>21</sup> 「豊前の民俗芸能」豊前市無形民俗文化財保存協議会、2001、p.12。『豊前市史』下巻、1991、pp.702-712参照。明治初年の頃は、旧暦2月5日に行われた。

<sup>22</sup> 鬼の頭は「椎田の海」に沈めたとされる。同上。

<sup>23</sup> 「墓目法」『修験道辞典』（宮家準編）東京堂出版、1986、p.313

記録上多様な祈祷を行ってきたことが確かめられ、また『感応楽』など中世以来の芸能も伝えている<sup>24</sup>。また、この祭りは当屋制とも密接な関連があり、弓射の際にも神官の背後には前年に籤で選ばれた7人の「当前」が控えており、それ以前の全ての祭りの世話役となり、この百手祭の直会において新しい当前への「当わたし」が行われる。この籤で一番籤に当たった者には伝来の掛軸が渡され、一年間自宅の床の間に掛けて朝夕礼拝することとなっている。その掛軸の中央には「厳島大明神 祭神市杵島姫八大竜王…」と書かれており、やはり神仏習合の要素が見られる。

さて、この祭りは供物や饗応の規式に細かい定めがあるが、大飯食らいに匹敵する行事は見られない。ただ細かく見ていくと、幾つか留意すべき要素はある。祭りの前日の夕刻から、当前七人の手で準備され、調整される「本座」の献立には、「盛相一ツ（赤飯を型に入れて押したもの）但胡麻塩附」の記載がある<sup>25</sup>。また、百手神事（弓射）終了後、青年会館で行われるその本座で新しい当前を選出する籤引き後、神前に供えられた高盛飯を含む御供が列席する人々に一箸ずつ分け与えられる。その後、盛相を戴く訳であるから、大飯行事とは認識されていないもののその基本形式は認められるのである。

また、この祭りの神事に用いられる供物の中に、特に興味深い物がある。当渡しにおいて、当前一番が旧当前一番から引き継ぐのは、五点の品である。前述した「厳島大明神の掛軸」、箱入りの「献立表」、葛籠に入った「袴」、「ユリ箱」、そして「御供椀」である。この内、ユリ箱は、縦38cm、横47cm、深さ10cm程で周囲を丸くした箱で、この中に白米三升三合三勺を入れ、これに「ホコ（銚か?）」と称する頭が円錐形の25cm程の棒を二本突き立てたものである<sup>26</sup>。これが当前一番の屋敷の祭壇に供えられるほか、百手祭の幾つかの神事でも御供となっている。確かに白米であって飯ではないが、その形状は三合の飯を高盛にして箸を立てた下島の御供を思わせて興味深い。

次に、同じく燧灘に面した、行橋市の海岸部、現在は陸続きであるがかつては島であった菟島の菟島神社で毎年5月21日に行われる百手祭を見てみたい。弓射に先立って、菟島神社本殿で大小二つの的<sup>27</sup>と当番区から奉納された二張の弓と二本の矢を供え、射手二名のほか氏子代表らが集まって祭式が行われるが、その際、宮司による祝詞の後、島内の法泉寺、西方寺、浄念寺の三名の僧侶が神前に並び、宮司による大太鼓の伴奏の中、般若心経を唱える。所謂「神前読経」[写真4]である。若者二名の射手の選出も中心である法泉寺の住職が、数珠に籤を付けることによって選ぶということであるから、本来は神仏混淆で僧侶の関与が大きかったことが伺われる<sup>28</sup>。

祭りの起源については伝承がある。室町時代の後半、燧灘に横行する海賊に対抗して始まったと伝えられる。大小二張の的は海賊の目に見立てたものだとも言われる。神前読経の後、神社から少し離れた「的場」と称する小祠に移動し、村人が見守る中、二名の射手は、立て掛けられた的に対

<sup>24</sup> 『豊前市史』下巻、1991、pp.754-771

<sup>25</sup> 同上、p.706

<sup>26</sup> 同上、p.707

<sup>27</sup> 大は直径2m30cm、小は1m80cmで、竹に紙を張った的である。

<sup>28</sup> 2004年5月21日の現地調査による。



写真 4：神前読経



写真 5：的場での弓射

して二回ずつ弓射する〔写真 5〕。終るとすぐ、押しかけた群衆による「的こわし」が行われる。その後は集落の長老による鶏卵団子の奉納があるだけで行事は終了する。大飯行事に関連するものは認められない。

なお、他の地域との関連で言えば、蓑島は、「松会行事」で有名な等覚寺の「お潮井採り」の場となっており、現在でも松会の際のお潮井は蓑島の海岸で採られている。等覚寺は現在は地名のみになっているが、豊前六峰の一つ、普智山に位置した寺社勢力であり、その影響圏にあったことと神前読経や百手といった民俗の成立は密接に関連していると推測できる。同じような関係で、前述の厳島神社の在る八屋の浜は、現在は廃絶したが、かつて豊前六峰の求菩提山（護国寺）のお潮井採りの場であった<sup>29</sup>。やはり、同様の影響を類推できるかもしれない。

#### 4. 淀川をめぐる宗教的環境

ここまで二丈町淀川の百手祭の直会で行われる「大飯食らい」を、全国的な幾つかの事例と比較し、さらにその前段となる百手祭を福岡県下の事例について検討してきた。何故、この地点に奇祭とも呼べる奇妙な行事が存在しているのかを究明したいが為である。その際、米や飯に霊力を認める信仰が予め存在するから大飯行事が「民間に広く」存在しているという民俗学的前提を留保した。それではある地点に何故そうした行事が存在しているかを何も説明したことにはならないからである。これまで見てきたように大飯行事は間違いなく「儀礼」である。儀礼というものは、元来は儀軌から派生した規律＝訓練（discipline）とも云える行為実践体系である<sup>30</sup>。頑なに保持されてきたその在り様を「信仰」の存在から説明することは難しい<sup>31</sup>。むしろ信仰の存在こそ儀礼から類推し

<sup>29</sup> 重松敏美『豊前求菩提山修験文化攷』豊前市教育委員会、1969、pp. 441-2。厳密に言うと古くは椎田湊の鬼ヶ洲という海浜の小島であり、以降に八屋の浜に移ったらしい。前述したように、椎田の海と「股手の藪」は鬼の伝承に絡んだ関係がある。

<sup>30</sup> タラル・アサド、前掲書、pp. 61-90

<sup>31</sup> Needham, R., *Belief, Language, and Experience.*, Basil Blackwell, 1972

たものに他ならないからである。

ではある儀礼の存在、その成立と保持を説明するものは何か。巨視的には権力関係がその手がかりとなる。儀礼自体が権力関係を発生させ維持させている側面もあるが<sup>32</sup>、儀礼の成立に社会的な権力関係の布置が関わっていることは否定できない。つまり、権力強者が権力弱者の側に与えた一つの形式が儀礼であるという見方である。もし仮に「宗教者」と「民衆」に分けて考えてみた場合、例えば「大飯食らい」の場合、民衆の側から「自然発生的に」生じた形式を宗教者が取り入れざるを得なくなったということが果してあるだろうか。むしろ、権力強者である宗教者が民衆に教唆し伝達したと見るほうが「自然」である。主体は宗教者であり、民衆は受動的な客体である。静岡県の下島の事例で示した「一時、オオメシ祭りをやめたらムラに悪い病が流行した」などの伝承は、民衆が受動的な客体であったことを示す表象とも思えるのである。

宗教民俗を考える場合、神仏分離を指標とする近代以前の社会の権力強者の位置にあったのは、中世期においては宗教に留まらず政治的社会的権門であった寺社勢力<sup>33</sup>、近世期には、同じく顕密の教義は保持しつつもその影響力が宗教領域に限定されつつあった祈祷系寺社である<sup>34</sup>。大飯行事に関してこれまで幾つかの事例を検討してきたが、それらの事例の背後に見え隠れしているのはこの祈祷系寺社ではないだろうか。しかし、淀川の場合はまだそれが明確ではない。そこで、この寺社勢力－祈祷系寺社の歴史仮説を念頭に置きつつ、淀川をその中心に含む現在の二丈町一帯の宗教的環境を検討して置きたい。

かつての寺社、特に中世の顕密寺社が山岳に依拠したことは確かである<sup>35</sup>。淀川の百手祭では、二丈岳(711m)との関連が見られるが、この二丈岳を中央に置くと西側には同じ脊振山系に、浮<sup>うき</sup>嶽<sup>だけ</sup>(805m)と隣接する十<sup>とんぼ</sup>坊<sup>やま</sup>山(535m)がある。山麓には浮嶽神社中宮があるが、ここはかつて「浮嶽白山妙理大権現」中宮で本地仏として阿弥陀・釈迦・観音の三体が祀られていた<sup>36</sup>。この三体とは同定できないが、現在も国指定の重要文化財として仏像三体(木造仏坐像・木造地藏菩薩立像・木造如来形立像)が残されている。いずれも平安前期と比定されるものである。現在は廃絶し地名となっているに過ぎないが、かつてここには「久安寺」<sup>きゆうあんじ</sup><sup>37</sup>という「怡土七ヶ寺」の一つがあった。怡土七ヶ寺は、奈良時代に渡来僧である清<sup>せい</sup>賀<sup>が</sup>上人が勅命によって建立したと伝えられる寺院で、院主坊・清永坊・浄至坊・奥之坊・正桂坊・大門坊・寺司坊・杖立坊・正覚坊・道実坊の属寺十坊

32 竹沢尚一郎『象徴と権力－儀礼の一般理論』勁草書房、1987、pp.258-265

33 黒田俊雄、前掲書、1995及び同書第2巻(顕密体制論)法蔵館、1994を参照。

34 祈祷系の用語は、圭室文雄による。圭室文雄「神仏分離」『図説日本の仏教』第6巻(第2刷)新潮社、1990、pp.336-354参照。もちろん葬祭を専らとした滅罪系と区別したもので、加持祈祷を主活動とする寺院群であり、宗派で言えば真言・天台が主である。近世期その数は圧倒的な程で既に近世中期から始まる神仏分離の標的は正しくこの祈祷系寺院であった。また寺社の用語は、神仏習合に基く寺院・神社複合体を指すものである。黒田俊雄「『寺社』か『社寺』か」『黒田俊雄著作集』第1巻(権門体制論)法蔵館、1994、pp.336-8参照。

35 例えば、名著出版から刊行された『山岳宗教史研究叢書』などを見れば明らかである。ただ山岳宗教=修験道という見方は幾分狭すぎるのではなかろうか。修験は顕密寺社の行人方が修する行法であり、もう少し広く捉えておきたい。例えば、遠日典『神仏習合』臨川書店、1986参照。

36 『二丈町誌(平成版)』2005、p.737

37 地名としては「きわじ」と読まれている。

を擁し、勢威を誇っていたが、戦国時代末期に滅びたと伝えられる。がこの内、清永坊は明治以降も存続し、現神主のK家に繋がることも云われる。ともあれ、現在も山頂の上宮、さらに麓の白山神社（下宮）を備えた三宮構成の下でオクンチの神輿巡幸などが行われている。また、周辺には数ヶ所、白山神社が分布しているが、やはりその勢力圏にあったと考えられる。その内、福井の白山神社では、大正時代まで「春祈祷」と称されていた「神楽」が現存している<sup>38</sup>。

一方、東側に目を向けると、獅子舞岳（841m）の中腹の白糸の地に、熊野神社（祭神：熊野三所権現）があり、その境内に本殿と隣接して観音堂（祭神：青龍大権現<sup>39</sup>及び十一面観音・准胝観音）がある。これまた、かつては清賀上人建立の怡土七カ寺の一つである「小倉山小蔵寺」であった。『太宰管内志』<sup>40</sup>には、建保5年（1217）の文書として清賀上人を初代として「實法房勢祐」以下十名の「院主次第」が載せられ、また熊野神社の棟札には天文11年（1542）領主である原田隆種が「小蔵寺鎮守権現」の社を再建したとあるから<sup>41</sup>、勢威ある寺社勢力であったことが分かる。近世以降は、麓にある宇美八幡宮神主T家が統括して今日に至るのであるが、このT家は、近世末まで社僧であったことが明らかである。寺号は長嶽山瑞雲院寶蔵坊で高野山金剛峯寺に属し、僧位は権大僧都法印であった。その下で今日まで存続する興味深い年中行事が、熊野神社で毎年12月18日深夜に行われる「寒みそぎ」である。白糸地区の大勢の裸の若者が神社の横を流れる身を切るような清流に身を浸して禊ぎ（垢離）をするのであるが、T神主以下三名の代表はやや上流部に向かい、三升三合の米を七回磨いで七回流すという独特の所作で磨ぎ、終るとすぐ本社に設けられた釜で炊き上げる。炊き上がった飯は、大型の折ぎ盆に先端の尖った円錐形に高盛にして、本社に三膳、観音堂に十二膳を供え〔写真6〕、その傾き加減で年の吉凶を占うのである。大飯行事こそ無いものの同系統の行事と見られなくもない。

さらに東側には同じ脊振山系の雷山（955m）が位置し、その中腹には清賀上人開創の怡土七カ寺の中心である雷山千如寺大悲王院があり、かつては僧坊三百坊を擁したと云われるが今日も真言宗の拠点寺院として隆盛している。詳しい経緯は省略するが<sup>42</sup>、山麓の人々が毎年5月3日に上宮に参拝する「峰尾登り」の習俗などが注目できる。

さて、中央部、二丈岳（711m）に焦点を合わせる。二丈岳に登拝する主なルートは二つあり、



写真6：観音堂に供えられた十二膳  
（中西裕二撮影）

<sup>38</sup> 『福井神楽』二丈町民俗文化財調査報告書第3集、二丈町教育委員会、2005

<sup>39</sup> あるいは龍樹権現とも云われる。

<sup>40</sup> 『太宰管内志』上巻、歴史図書社、1969、p64

<sup>41</sup> 吉田扶希子「雷山千如寺に関する一考察」、西南学院大学大学院『文学研究論集』第22号、2003、p. 305

<sup>42</sup> 同上、pp. 285-328、参照。

一方の麓に淀川が位置するが、もう一方の山麓にあるのが一貴山<sup>い きさん</sup>集落である。集落は一貴山川の支流が合流する地点にあり、村の入口に仁王門がある独特の構えを有している。ここが怡土七カ寺の「一貴山夷<sup>い きじ</sup>巍寺」に該当することが明らかであるばかりか、かつての八坊がどの家屋敷に当たるかも明白である。即ち、政所坊（T家）・寂照坊（K a b家）・大教坊（K u家）・寂光坊（A o家・K a w家）・門善坊（A r家・Y家）・覚門坊（H家・Y家）・華藏坊（H家）・尊嚴坊（S家）である。近世期には既に退転し、還俗して久しいが、何故に同定が可能で人々の意識にも明らかであるかという点、一つには屋敷の内部や門前に坊名を刻んだ石塔が存在するからである。これらがどの程度古いのか多くは不明だが、例えば大教坊の門前にあるものは「弘治四年天（1558）大教坊法印」（西暦は筆者）と刻まれている【写真7】。もう一つの理由は、共同で行う行事の存在である。八坊の内、政所坊は近年福岡市内に転出したが、残る七坊は、毎年12月24日に「天台大師講」を行っている。各坊が輪番で「天台大師の掛軸<sup>43</sup>」を預かり、この日近隣の僧侶を招いてそれを掛けて読経礼拝し、その後直会を行うのである。また、毎年9月16日には「二丈岳参り」が行われるが、早朝、坊全員が集合し、山頂の上宮を参拝するのである。



写真7：大教坊門前の石塔

この一貴山に隣接するもう一つの登り口に当たるのが淀川である。その宗教的環境を考えると濃厚な神仏両部・顕密寺社地帯の中に在ると云わざるを得ない。さて、現在、百手祭で三回ずつ三度の弓射を一番に行い、直会の座でも上座の中央に座するのは深江神社の宮司（K u氏）である。深江神社は、隣接する深江本町に在り、近世期中津藩領以来周辺十四カ村の総宗廟とされてきた神社である<sup>44</sup>。その創立は、建仁3年（1203）に遡る。土地の領主原田種直が、信奉する竈門宝満宮・大宰府天満宮を上深江の地に勧請し、さらに現在地に移した年だとされる<sup>45</sup>。さらに天正20年（1592）、肥前名護屋城に出陣した豊臣秀吉の命による本社再建の棟札があるが、この時以降、秀吉によって秀頼誕生を祝って、宮司の坊号に、「誕生山神護寺秀覚院」の寺号が加えられたとされる。この両部の形式は以降、近世期も変化していない。例えば、深江神社に保管されている「延宝6年（1678）の棟札」には、「宮司大法師俊良房」の記載がある。宮司大法師とは何であろうか。まさに両部そのものである。さらに下って元禄年間（1689-1703）の記録には次のように記されている。

<sup>43</sup> 絹製で中央部に若かりし頃の最澄の坐像が描かれている。年代は現在、鑑定中である。また、最近、仏像らしきものが線刻された銅製の鏡像が寂光坊から発見され、これも鑑定を進めている。

<sup>44</sup> 『二丈町誌』1967、p. 476

<sup>45</sup> 『二丈町誌（平成版）』2005、p. 730

「 宝満大菩薩 淀川村 宮司俊了坊  
 両神一社 禪宗妻帯  
 天満大自在天 深江村 社人 左京 」<sup>46</sup>

まず祭神が宝満大菩薩及び天満大自在天と仏神の表記となっており、両神で一社とされている。祀る主体は、宮司俊了坊はそのままで、さらに左京という社人が加わっている。祭祀対象が仏神なのであるからおそらく主格は俊了坊であり、社人を使って密教的作法の下で奉持したと見るべきであろう。禪宗妻帯とは、近世期であるから宗派所属は形式的に禪宗のいずれかの宗派であったろうし、もし僧侶であれば清僧、即ち非妻帯が本義であるが、俊了坊は宮司であるので「妻帯」したということになる。つまり、代々の子孫に受け継がれていったのである。ここに見られるのは「宮司大法師」という宗教者の今日から見れば複雑な性格である。半僧半俗の形でありながら、明らかに「修験者」とは違い、しかもこの時期他の史料から推測されるように、俊了坊は深江宮という由緒ある寺社を拠点として活発に加持祈祷を主とする活動を展開したのである。地方における祈禱系寺社の一つの在り方を示すものである。

しかしながら、おそらく居住地を示すであろう村の表記が、社人は深江村であるのに、俊了坊は何故に淀川村となっているのか。今回の調査で見発された史料がその経緯の一端を物語る。それは天保11年（1840）の「神社仏閣書上」である。この中から関連する部分に焦点を合せて検討してみたい。まず、上述の深江村の神社についてであるが、

「 宝満宮 淀川村宮司 秀学院  
 両神 一社 抱  
 天満宮 深江村社人 三橋伊賀 」

俊了坊という坊号ではなく、秀学院という院号で表記されており、社人は三橋伊賀となっているが、この両人が所有・管理者となっている。既に近世後期のこの時期に、秀学院という宮司の存在、つまり宮司大法師という在り方が許容された理由の一つは、この共同管理という形態にあったかもしれない。つまり、社人が吉田裁許を得ることで、ここ深江では神仏混淆の仏教的な部分を秀学院が、神道的な部分を社人が受け持つことでうまく棲み分けたのである<sup>47</sup>。事実、境内末社や深江村内の宗教施設について、秀学院は同社の「御本地堂」「御供屋」「川上大明神」、三橋伊賀は「大神宮」「秋葉宮」「稲荷宮」と所有管理を二分し、秀学院はさらに村内の「地藏堂」や「天満宮」をも「抱え」としている。そしてここでも秀学院については「淀川村宮司」とされている。

では、淀川村の記述はどうか。その筆頭に挙げられているのは、「天神」、即ち現在の淀川天神社

<sup>46</sup> 『二丈町誌』1967、p. 477

<sup>47</sup> 吉田裁許については、橋本政宣「寛文五年『諸社祢宜神主等法度』と吉田家」橋本政宣・山本信吉編『神主と神人の社会史』思文閣出版、1998、pp. 263-310参照。

である。拝殿は二間×三間半、祠が三尺四方と現在と同じである。その説明を読み下すと以下の通りである。

「是は無年貢地、古来より鎮座の神にて淀川天神と唱え来たり、正月二十五日祭礼、社人産子同寺へ打ち寄り、桑の弓、蓬の矢にて百手の的矢等仕り、俗に百手の祭と申し候。往昔、淀川徳太郎家より神事等一切仕り来たり候ところ、中古、和田氏の者へ相譲り、その子孫にて祭礼仕り来たり申し候。」(傍点筆者)

さて、傍点を付したが、天神社の同寺とは何処であろうか。それとも同社の誤りであろうか。もし寺が存在しないのなら誤りであろうが、深江より遥かに小規模なこの村で寺と呼べる場所は一箇所しかない。それより後方に記述される「真言宗」として挙げられている三間×七間半の寺院である。「紀州高野山金剛峯寺末寺」の「誕生山 秀学院」と記され、「是は無年貢地にて宝満宮天満宮宮司に御座候」と説明されている。その場所については現在不明である。しかし狭い村の中で、現行の弓射が行われる場所を考え合わせると、天神社の向かい側、即ち公民館の場所と推定できるかもしれない[写真8]。



写真8：神社前公民館横での「山打ち」

もう一点、上記記述に云う「社人」とは誰であろうか？産子(氏子)は村の約二十軒と考えられる。祭の現行の形態から考えて村外から社人が訪れるとは思えない。だとすれば、淀川村の記述に現れるさらに二人の宗教者しかない。一人は「不動堂」を管理する「英彦山天台修験成円坊末派 山伏 宝蔵坊」であり、今一人は「彦山大権現・不動・大内<sup>48</sup>」の二間半×三間半の堂一字を管理し、二間半×三間半の「庫裏」を所有していた「英彦山天台修験成円坊末派 山伏 泉蔵坊」である。なお、行間朱書によれば、この二人は兄弟で雷山が滅亡した時にここに逃れて山伏となったと記されている。

確かに、淀川天神の所有・管理者は「百姓 義平」となっており、また祭の記述では淀川家から引き継いだ和田家の子孫が執り行うことになっている。しかし一方で「淀川村宮司」たる秀学院が無関係ということは有り得ないのである。秀学院は深江神社に関しては三橋伊賀という恐らくは唯一神道の社家を用いざるを得なかったであろうが、自らのホームタウンである淀川では、より密教色の濃い山伏を使って祭礼を執り行ったと思えるのである。

最後に大飯行事についての現段階での仮説を述べておきたい。通常の饗応において主人(ホスト)

<sup>48</sup> この内、「大内」が何を意味するかは不明である。



と客（ゲスト）はどちらが偉い、つまり権力強者であろうか。客であることは云うまでもない。我々は客に喜んでもらおうと思って歓待するのである。田舎へ行くと食べろ食べろと催促されるが、それは客に満足してもらおうと気持ちからであって、ホストの側が低い地位にある、あるいは低い地位に自らを置くことは明らかである<sup>49</sup>。ところが、大飯－強飯ではこの地位が逆転しているのである。つまり、給仕し接待する側（ホスト）が客（ゲスト）より、地位が上で偉いのである。ここに大飯－強飯の儀礼としての発生源があるように思える。日光の強飯などはその一方の極である。しかし通常の生活ではあり得ないことであり、だからこそ儀礼として残ったのである。特に宗教的権威がそこに重なる場合はなおさらである。

百手祭の直会である大飯行事の場合、給仕する側の長を「御座<sup>おんざ</sup>」と最大限の敬語で呼ぶのは何故だろうか？また、行事の場が女人禁制となるのは何故であろうか？筆者は、御座とは秀学院俊了坊その人であり、「寄り子」とは彼が配下として用いた山伏ではなかったか思うのである。おそらく一年に一度、秀学院や山伏の主導の下に執行された百手の儀礼の後、今度は彼や山伏が「座方」として給仕役に廻り、村方を寺院の庫裏に招いて独特な饗応の形式による振る舞いを行ったのであろう。米自体は寄り子である山伏らが一軒一升という単位で強制的に徴収したものであったとしても、顕密修法による御供として供された大飯を戴くことは誠に「有り難い」機会ではなかったろうか。ところが、明治の神仏分離を経て状況は一変する。秀学院は淀川村を去り、また山伏も退転し、恐らくは村を去ったのであろう。残された村人はどう対処しただろうか。彼らの胸中にあった最大の命題は「祭を中断してはならない」ということではなかったか。明治の初期、彼らは自ら「御座」と二、三名の「寄り子」を選出し、自らが給仕する側と接待される側に分かれてこの特殊な直会の形式を守ったのである。事実、その頃から以降の記録は残るのである。また、寄り子が米を徴収するところの特殊な形式は、彼らが受身であったが故によく記憶され、縄に結び目を作っていく数え方【写真9】がなお踏襲されているのである。しかし、彼らにとって困ることがある。現在、マスコミや研究者に「何故大飯を食うのか？」「大飯の意味とは何なのか？」と問われることである。現在もそしてかつても彼らは「知らない」のである。やっている本人が知らないのが儀礼の最大の特徴である。儀礼とは、形式を踏襲し実践していくことであり、やること、即ち実践にこそ意義があるのである。



写真9：縄を示す村人

<sup>49</sup> この点を民俗学は見誤って、歓待の習俗から大飯－強飯儀礼が生起したと直接繋げている点が多く見受けられる。

## 5. 今後の課題

淀川の大飯行事に関する微視的な仮説は上述した。そしてそれを支える巨視的な仮説は既に何度か述べたように、宗教民俗の形成や成立、その維持や展開に関わったのは、寺社勢力－祈祷系寺社ではなかったかということである。これは種類としては、一種の歴史仮説である。歴史仮説であれば実証することが可能である。もし誤っていれば、別の宗教主体を検証することができる。ところが、民俗学や宗教民俗学では、民間信仰とか民俗宗教といった「超歴史的な」概念を設定する。その形成と担い手は「民衆」ということになろうが、超歴史的であるため検証は不能である。分かりやすく言えば、既に答えが決まっているようなものである。大飯行事を見た途端、宗教主体を考慮するまでもなく、穀霊信仰で話がついてしまうのである。だからこそ、敢えて民俗宗教仮説を留保して、宗教民俗の歴史的動態 (historical dynamics) を探るアプローチを採ったのである。

しかしながらまだ問題がないわけではない。寺社勢力や祈祷系寺社の在り様を探ったからと云って、それらが今日残る宗教民俗行事に繋がる何らかの形式を保有していなければその関係を云々することはできない。淀川の大飯行事に即して言えば、では秀学院は大飯という饗応形式を一体何処から持ってきたかということである。日光では遠すぎてあり得ないし、第一、もしそうなら「強飯」に類する名称や内容が伝わるはずである。

宗像宮は、中世期は規模の大きい複合的な寺社勢力であり、近世に入っても、例えば福岡藩は「例の五社」として、特に近世中頃から雨乞い、日乞い、風鎮めなどに際して加持祈祷を依頼するのだが、「<sup>くだん</sup>宮崎 (箱崎八幡宮)・宰府 (太宰府天満宮)・宝満・雷山 (千如寺)」と並んで「田島 (宗像宮)」としてその一つに数えられる拠点となった祈祷系寺社である。その宗像宮において、応安八年 (1375) に成立した「応安神事次第」は、その年中行事を記した福岡県下では最古の史料である。その中に、「大飯 (タイハン)」と称しているが、大飯に比類する行事形式が年中行事のうち、七回にわたって出てくるので、『宗像神社史』下巻 (宗像神社復興期成会、1966) から抜粋してみたい。なお、大飯を太字にし、また括弧内に頁数を付した。

「正月十三日 <sup>イリケショウノ</sup> 弥勒寺入花箱事 (88頁) : 惣宮師役

弥勒寺の前に「円座」と「引敷」を敷き、各員手松を燃し、庭には「太松」を燃く。神官と社僧の着座が済むと、次に「猿楽」。終わって、政所は「<sup>タイハン</sup>大飯」(台飯) 酒肴を合せ、神官は「高ライシ」をもって「<sup>カミノノゾムマエ</sup>上御前」に供し饗膳となる。この間、佛供・燈明及び次第の法要が行われる (社僧三人の役)。

同十四日 弥勒寺中夜佛事 (89頁)

式次第は十三日と同じ、**大飯**・酒肴ともに同前、各手松を持つ。

二月の終わり <sup>ハルノヨウマツリ</sup> 春大祭事（131頁）

政所の廳座において「大飯」（台飯）御酒（甘酒）を用意し、諸員に振る舞いがある。

四月一日 神湊木皮社祭礼（147頁）

御供献進の後、「廳座事」<sup>チョウサノコト</sup>：神官衆に対し、政所諸役の「大飯」と御酒一瓶及び貝、鮑、魚、富葛をもって饗膳が行われる。

四月晦日 惣社神祭事（155頁）

饗膳は、合掌三供の「大飯」符米三升と菜八種<sup>精進四</sup>、魚四でこれを「柏」の葉に包んで下す。

十二月二十五日 政所社七歌神事<sup>アフコオリ</sup>（杵折）（255頁）

政所から「大飯」と酒肴とが出る。

十二月晦日 政所社西神殿神事<sup>ニシノカウトノ</sup>（258頁）

先ず廳座で「大飯酒肴」がある。」

如何であろうか。勿論、ここに見る大飯が、本稿で対象とした大飯行事と同形式のものであるとは云えないが、少なくとも正月から春にかけて、そして暮れ近くに行われていることが分かる。また「合掌三供の大飯」とか神官衆への饗膳とか、神仏習合の形式で、また「符米三升」との付記や、「台飯」との注記も気になる所である。しかし、詳しい検討は今後の課題として、一まず本稿を終えたい。（完）

[参考文献]

- タラル・アサド／中村圭志訳『宗教の系譜』岩波書店、2004
- 黒田俊雄『寺社勢力—もう一つの中世社会』岩波新書、1980
- 『黒田俊雄著作集』第1巻（権門体制論）法蔵館、1994
- 『黒田俊雄著作集』第2巻（顕密体制論）法蔵館、1994
- 『黒田俊雄著作集』第3巻（顕密仏教と寺社勢力）、法蔵館、1995
- 主室文雄「神仏分離」『図説日本の仏教』第6巻（第2刷）新潮社、1990、pp.336-354
- 重松敏美『豊前求菩提山修験文化攷』豊前市教育委員会、1969
- 『静岡県の祭り・行事』（静岡県教育委員会編）2000
- 柴田立史「日光の延年舞と強飯式」宮家準編『山の祭りと芸能』上巻、平河出版社、1984、pp.218-222
- 『修験道辞典』（宮家準編）東京堂出版、1986
- 竹沢尚一郎『象徴と権力—儀礼の一般理論』勁草書房、1987
- 『太宰管内志』上巻、歴史図書社、1969
- 遠日出典『神仏習合』臨川書店、1986
- 『二丈町誌』二丈町誌編纂委員会、1967
- 『二丈町誌（平成版）』二丈町誌編纂委員会、2005
- Needham, R., *Belief, Language, and Experience.*, Basil Blackwell, 1972
- 『日本民俗大辞典』上巻、吉川弘文館、1999
- 橋本政宣「寛文五年『諸社祢宜神主等法度』と吉田家」橋本政宣・山本信吉編『神主と神人の社会史』思文閣出版、1998、pp.263-310
- 『福井神楽』二丈町民俗文化財調査報告書第3集、二丈町教育委員会、2005
- 福原敏男『神仏の表象と儀礼—オハケと強飯式』歴博ブックレット23号、(財)歴史民俗博物館振興会、2003
- 『豊前市史』下巻、豊前市史編纂委員会、1991
- 『豊前の民俗芸能』豊前市無形民俗文化財保存協議会、2001
- 『宗像神社史』下巻、宗像神社復興期成会、1966
- 柳田國男「食物と心臓」『定本柳田國男集』第14巻、筑摩書房、1969、pp.223-375
- 吉田扶希子「雷山千如寺に関する一考察」、西南学院大学大学院『文学研究論集』第22号、2003、pp.285-328